

富山県黒部市生地地区における湧水の利用

- 「清水めぐり」を中心としたまち歩き観光とその課題 -

Utilization of Spring Water in Ikuji, Kurobe-shi, Toyama Prefecture

助 重 雄 久・生地の清水研究グループ

SUKESHIGE Takehisa, Researching Group of Spring Water in Ikuji

はじめに

富山県には扇状地の扇端部や平野の縁辺部に数多くの湧水があり、うち4か所(立山玉殿の湧水、穴の谷の霊水、瓜裂清水、黒部川扇状地湧水群)が環境省の「名水百選」に選定されている。このうち黒部川扇状地湧水群は、立山・後立山連峰から流出し黒部峡谷や扇状地の地下を経てきた水が海岸付近で湧出しており、「名水百選」に選定された4つの湧水のなかでも豊富な湧出量を誇っている。湧水群は古くから住民の日常生活や地場産業に利用されていたが、上水道の普及によって生活との結びつきが薄れてきた。しかし、近年では湧水を「おいしい水」として見直す動きが全国的に高まり、黒部川扇状地の湧水を訪れる人々も増加してきた。

湧水に関しては水文学・水理学等の分野を中心に数多くの研究成果が蓄積されてきた。これらの多くは水質や湧出機構、水位・湧出量や地下水脈の変化などに着目したものであった。黒部川扇状地に関する研究としては、水循環を明らかにした山本・樞根(1971)¹⁾、ダム・水田・河川などの水位や海面潮位と湧水井の水位変動との関係を考察した杉沢ほか(2000~2003)²⁾³⁾⁴⁾、地下水の海底への湧出について考察した中田(2002)⁵⁾などがみられる。

いっぽう、生活・産業への利用に関する研究は人々の水への関心が高まるにつれて増えてきた。日本地下水学会編(1994)⁶⁾は、全国の名水を水文学的な側面から調査・分析するとともに、その利用について紹介している。また、事例地域の研究としては黒部川扇状地における地下水の利用実態を考察した吉島(1995)⁷⁾、岐阜県郡上八幡における住民の湧水利用に言及した山口ほか(1998)⁸⁾、秋田県内にある湧水の利用について詳述した肥田・吉崎(2001)⁹⁾、大分県内の「伝説の水」について水質や水利用との関係を探った河野(2003)¹⁰⁾などがみられる。しかし、これらの研究も水文学的な分析を主体としたものが多く、人文地理学的な視点から住民や地域外からの来訪者(以下、「来訪者」と称する)による湧水の利用実態を考察した研究はほとんどみられない。

以上の点をふまえて、本稿では黒部市生地地区の「^{しょうず}清水」を住民や来訪者がどのように利用してきたのかについて明らかにしていく。とくに来訪者の利用実態に関してはききとり調査をもとに考察を進め、黒部市や黒部市観光協会が推進している「清水めぐり」を中心としたまち歩き観光の可能性と課題について検討していきたい。

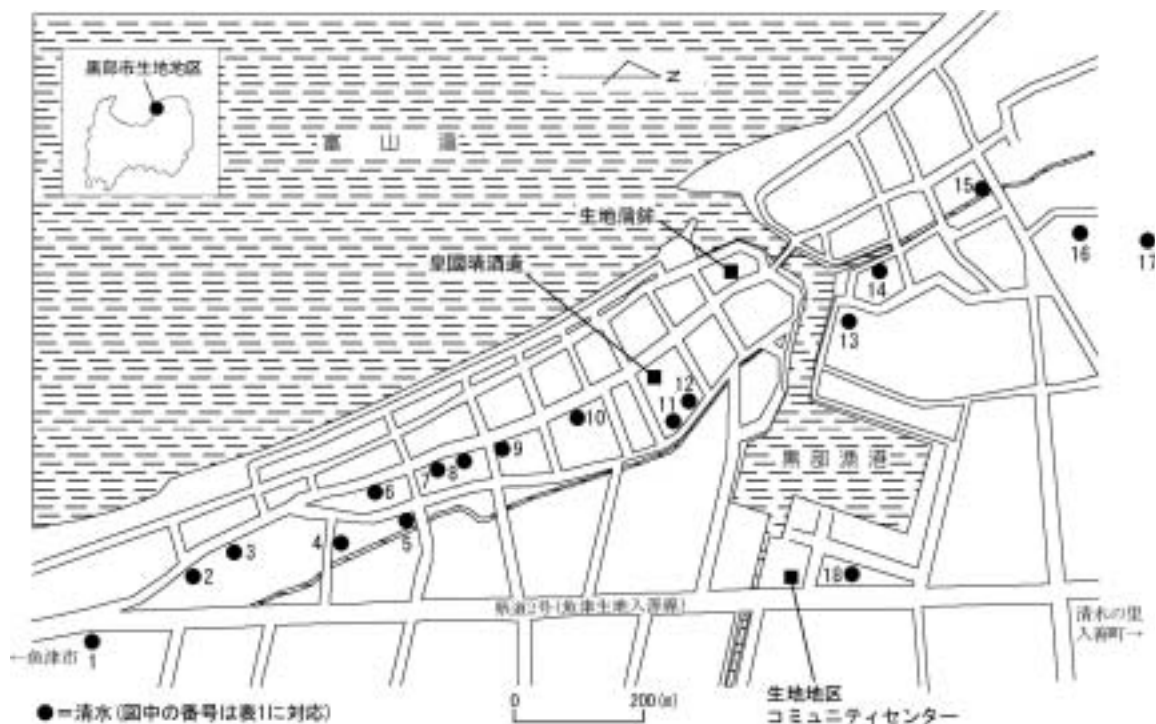


図1 研究対象地域(助重原図)

研究対象地域の概要

黒部市生地地区は市北西部の富山湾岸に位置している。富山湾岸に突き出た生地鼻には富山県最大の灯台である生地鼻灯台(高さ 30m、光達距離約 30km)がある。また地区の中心部には掘り込み港である黒部漁港(生地漁港)があり、港口には日本初の片持式旋回可動橋である生地中橋がある(図 1)。また、隣接する村椿地区には YKK の拠点工場である黒部工場・越湖工場があり、両工場を含む黒部事業所全体で 6,900 人が就業している¹¹⁾。

2000 年国勢調査時における生地地区の人口は 4,523 人(男 2,116 人、女 2,407 人)であった。このうち 65 歳以上の割合は 23.9%で、市内 10 地区でもっとも高い(黒部市の平均は 20.8%)。若年層の地区外への流出が著しく、高齢者のみの世帯が増加している。

生地地区の主な産業は漁業および水産加工業である。漁業では地引き網漁や富山湾や能登沖でのカニ・イカ・ブリ・アジ漁がさかんであった。しかし、地引き網漁は激しい海岸侵食によって困難となった¹²⁾。また、富山湾や能登沖での漁も漁業者の高齢化や安価な輸入魚介類の台頭などにより不振となった。黒部市における 2001 年の漁獲金額は 5 億 3,022 万円で、最高であった 1980 年(13 億 6,113 万円)に比べ 61.0%も減少した。

水産加工業ではかまぼこ・昆布・干物などの食料品製造が営まれている。このうち、かまぼこは地場産の魚と工場敷地内の湧水を用いて生産してきたが、近年では地場産原料の枯渇もあって安価なロシア産スケトウダラが主原料となった。また、湧水は食品衛生法上にもとづく水質検査

で塩分濃度が基準値を超えたため、近年では扇状地の地下水を水源としている市の水道水を利用するようになった。

水産関連以外の主な地場産業としては酒造業がみられる。皇國晴酒造は今日においても工場敷地内にある岩瀬家の清水を仕込み水として利用し「幻の瀧」などの日本酒を生産している。また生地地区には海岸の旧道沿いに多くの商店が並んでいたが、近隣地区への大型店の立地や高齢化の進行に伴って多くの店舗が閉店しており、商業の衰退が著しい。

湧水の分布と住民による利用

1. 湧水の分布

生地地区では市の上水道が整備された今日においても500～600戸で自宅内の湧水や井戸を利用している。かつて生地地区では家屋の地下を1～3m掘り下げ、自然湧出する水を日常生活に利用する家が数多くみられた(写真1)。しかし、こうした湧水は湧出量の減少、雑菌混入の恐れ、湿気による家屋の損傷、上水道の普及などが原因となってしまい姿を消し、近年では数戸の家屋で使用されているにすぎない。

また、生地地区には清水が18か所あり、そのうち11か所は住民が共同で利用できる共同洗い場になっている(表1)。他の7か所は寺社の境内や個人住宅、旅館の敷地内にある。月見嶋の清水(No.16)は、新治神社内の池から湧出していたが現在は枯渇している。また名水公園の清水(No.18)は黒部川扇状地湧水群が1985年に「名水百選」に選ばれたのを記念して名水公園内に新設されたものである。

2. 共同洗い場の利用とその変化

共同洗い場もかつては地面を数m掘り下げ、その底から自然湧出する水を利用したものが多かった。しかし、こうした洗い場は家屋の地下にある湧水と同じ原因によって使用が困難となり、「中島の清水」のみが往時の姿をとどめているにすぎない(写真2)。

大部分の共同洗い場は地下数十mの水脈に打ち込んだパイプから自噴する地下水を用いている。また、洗い場の多くは絹清水(表2のNo.10、写真3)のようなコンクリート製や、清水庵の清水(No.14、写真4)のようなステンレス製に改装され

表1 生地の清水

No.	清水の名称	備考
1	みどり町の清水	
2	前名寺の清水	前明寺内・公開可(要連絡)
3	田村邸の清水	私有・非公開
4	中島の清水	
5	神明町の共同洗い場	
6	神田の清水	
7	弘法の清水(A)	
8	弘法の清水(B)	
9	殿様清水	
10	絹清水	
11	岩瀬家の清水	皇國晴酒造内・非公開
12	弘法の清水(C)	
13	第一温泉の清水	「生地第一温泉」内・非公開
14	清水庵の清水	
15	源兵サの清水	
16	月見嶋の清水	新治神社内から湧出、現在枯渇
17	生地温泉の清水	温泉旅館「たなかや」内・非公開
18	名水公園の清水	

注:1) は、共同洗い場を示す。

2)「弘法の清水」は3か所あるため、便宜上(A)～(C)とした。

資料:黒部市商工観光課資料をもとに作成



写真1 家屋の地下にある湧水(撮影:助重雄久)



写真2 中島の清水(撮影:助重雄久)



写真3 絹清水(撮影:平澤光)



写真4 清水庵の清水(撮影:助重雄久)

ている。これらは2~4槽に分かれており、利用者が「湧出口側の槽は食品の冷却、中間は野菜洗い、排水口側は洗濯」といった暗黙のルールを守ることによって清潔性の保持と水の有効利用を図ってきた。

1950年代以降、いくつかの洗い場では近隣の工場での揚水量が増加した影響などにより湧出量が減少した。このため、絹清水と清水庵の清水はさらに深い地下水脈にパイプを打ち込みなおした。清水庵の清水は地下約100mの水脈に1983年に打ち込んだ新たなパイプから多量の水が湧出しているが、地下約20mに打ち込んだ古いパイプからもわずかながら湧出しており、毎分約600リットルという豊富な水量を確保している¹³⁾。

3. 共同洗い場の管理

共同洗い場の大部分は自治会員や近隣住民が当番制で維持管理や清掃を行っている。清水庵の清水は86人の管理組合員(恒常的な利用者)が8組に分かれ、当番制で毎週末に清掃を行っている。絹清水は利用者全員で清掃を行っているが、回数は週1回または月1回と一定していない。殿様

清水(No.9)でも町内会の組ごとに清掃を行っているが、汚れがひどい場合にのみ行っている。神田の清水(No.6)や弘法の清水(A)(No.7)は、通常ほとんど清掃を行っていない。

こうした清掃作業の頻度差は清水そのものの利用頻度の差に起因するものと思われる。清水庵の清水では早朝から夕方まで洗濯、野菜洗い、水くみにくる住民が絶えない。いっぽう神田の清水や弘法の清水は近隣に高齢者が多いこともあって自宅内の水道水や井戸水を利用することが多いため、清水を利用する住民をほとんど見かけない。住民による利用が少ない清水は来訪者もほとんど利用していない。住民の利用頻度の差は、来訪者の人数の差にも結びついているといえる。

来訪者による清水の利用

1. 「清水めぐり」の観光化

日本では上水道の普及や地下水の汚染によって、湧水や地下水を飲料水として利用することが少なくなった。しかし、近年では湧水や地下水が「おいしい水」として見直され、湧水や地下水を用いた日本酒やビール、「おいしい水」のペットボトルなどがヒット商品になっている。また、全国各地の名水を巡って水を飲んだり、くんで持ち帰ったりする「名水めぐり」もブームになっている。このため、自治体のなかには湧水を重要な観光資源と位置づけ、大々的にPRしているところも少なくない。

黒部市では、観光協会が中心となって2001年に「黒部市観光中長期ビジョン」を策定した。このビジョンでは生地のまちのたたずまいを重要な魅力要素と位置づけ、この地区を「都市観光まちづくりモデル地区」に指定して「まちなか観光ツアー」(まち歩き)を推進することが提案された¹⁴⁾。観光協会や市はこの提案にもとづいて案内板の整備、生地まち歩きマップの作成・配布、旅行雑誌・テレビ番組の取材受け入れや、市民有志が清水等の案内を行う観光ボランティアの募集などを進めてきた。

2001年の5~6月には観光協会や市の職員が参加して、試行的な生地まち歩きが2回実施された。その後、8月4日には一般市民による「いいところ観光」(62名参加)、10月2日にはJTB川越支店(埼玉県)が一般公募した「まち歩きツアー」(25名参加)が実施された。また、2001年夏以降はテレビ番組でもたびたび清水がとりあげられた。9月にはTBS系列の「スパSPA人間学・美肌特集」で生地の清水の美肌効果を実証する実験が全国に放送され、放送を機に県外からの来訪者が急増した。

いっぽう、黒部市・魚津市・入善町・宇奈月町・朝日町の2市3町からなる新川広域圏では水博物館構想を推進している。この構想は博物館施設を建設するものではなく、新川広域圏全体をフィールドミュージアム(野外博物館)とみなし、住民に黒部川や扇状地などに関する知識を深めてもらうことを目的としている。新川広域圏ではこの構想にもとづいてさまざまな研究調査活動や一般市民向けのフィールドツアーを実施している。

以上のように、黒部市や新川広域圏では豊かな水を学習の場や観光資源として地域の内外に印象づける取り組みがさかんに行われ、地域外からの来訪者も着実に増加している。次節では、こうした来訪者が清水をどのようにして認知し利用しているのかを、現地で行ったききとり調査をもとに検討していく。

2. 実態調査とその方法

利用実態調査は、生地地区にある3つの共同洗い場(神明町の共同洗い場、絹清水、清水庵の清水)と生地駅前の清水の里(村椿地区)を訪れた来訪者に対してききとり調査(対面調査)方式で行った。ききとり調査の質問項目は表2に示したとおりである。

表2 調査項目

<p>====聞き取り調査対象者の属性====</p> <p>[性別] a. 男 b. 女</p> <p>[年齢] a. 20歳未満 b. 20~29歳 c. 30~49歳代 d. 50~69歳 e. 70歳以上</p> <p>====質問====</p> <p>1. [ききとり対象者の居住地]どこからこの清水にこられましたか？(1つだけ回答)</p> <p> a. 黒部市内(生地以外) b. 富山県内... []市・町・村</p> <p> c. 他の都道府県... []都・道・府・県 d. 国外...国名 []</p> <p>2. [清水の訪問目的]この清水を訪れたおもな目的を教えてください。(1つだけ回答)</p> <p> a. 水を飲みに来た(持ち帰らない) b. 水を飲んで持ち帰る(水くみが主目的)</p> <p> c. 仕事で来たついでに水を飲んで帰る</p> <p> d. 旅の途中で訪れた...生地以外のおもな訪問先 []</p> <p> e. その他 []</p> <p>3. [訪問時の交通手段]生地までに来るのに利用した交通手段を教えてください。(1つだけ回答)</p> <p> a. 自家用車 b. レンタカー c. 電車+路線バス d. 観光バス e. 自転車</p> <p> f. 電車+徒歩 g. その他 []</p> <p>4. [清水の利用頻度]この清水をどのくらい利用されますか？(1つだけ回答)</p> <p> a. 毎日 b. 2、3日に1回 c. 週に1回 d. 月に1~2回 e. 年に数回</p> <p> f. 今回はじめて訪れた g. その他 []</p> <p>5. [清水の認知手段]この清水をどのようにして知りましたか？(複数回答可)</p> <p> a. 偶然通りかかった b. 地元の人から聞いた c. 旅の本や雑誌 d. 黒部市の観光パンフ</p> <p> e. 黒部市のホームページ f. 黒部市以外のホームページ g. テレビ番組(湧水特集等)</p> <p> h. その他 []</p> <p>6. [観光地化への課題]「清水めぐり」を観光化するとしたら、どんなものが必要だと感じますか？(複数回答可)</p> <p> a. 今のままでよい(新しい施設は不要) b. 駐車場の確保 c. 食堂など飲食店の充実</p> <p> d. 案内板やパンフ等の充実 e. ホームページによる情報提供 f. 洗い場の整備(蛇口の改良等)</p> <p> g. 湧水ミュージアム等の施設建設 h. 水を汚さないためのルールづくり i. まち全体の活性化</p> <p> j. その他 []</p> <p>7. [他の湧水の訪問状況]生地以外で訪れたことのある湧水をあげてください。(複数回答可)</p> <p> a. 穴の谷の霊水(上市町) b. 城山の湧水(上市町) c. 魚津駅前のうまい水(魚津市)</p> <p> d. 入善町の湧水群 e. 石倉町・泉町(富山市、いたち川沿い) f. 立山玉殿の湧水(立山、室堂平)</p> <p> g. 瓜裂清水(庄川町) h. その他 []</p> <p>8. この清水を見た、あるいは水を飲んでみた感想や印象をお聞かせください。(どんなことでもかまいません)</p>

3つの共同洗い場や清水の里はテレビ番組等で紹介される機会が多く、地区外からの来訪者が来る可能性が高いと考えられるため、これらの4か所を調査地点に選定した。また、生地地区コミュニティセンターでは休日に観光ボランティアのメンバーが観光案内や名水コーヒーの販売を行っているため、このセンターに立ち寄った来訪者も調査対象とした。

調査は2003年8月と10月に実施した。8月3日(日)には黒部市観光ボランティアのメンバーと富山県立桜井高等学校生活環境科の生徒3名・教諭2名、富山国際大学地域学部の学生有志5名、教員1名が参加し、4か所の清水で調査を行った。また、8月中の週末は観光ボランティアのメンバーが生地地区コミュニティセンター等で調査を実施した。さらに10月26日(日)には富山国際大学地域学部の共通地域学科目「地域地理学演習」の受講学生9名と教員1名が参加し、4か所の清水で調査を行った。なお、調査方法や使用した調査用紙はすべての調査で統一を図った。

3. 調査結果

回答者は178名であったが、うち26名は生地地区の住民であり、今回の調査対象からは除外した。したがって、有効回答を得た対象者は152名(男性92名、女性60名)であった。年齢別にみると20歳未満は11名(7.2%)、20~29歳は20名(13.2%)、30~49歳は50名(32.9%)、50~69歳は60名(39.5%)、70歳以上が11名(7.2%)であり、老若を問わず幅広い年齢層が訪れていた。

次に、各質問項目に対する回答結果について考察していく。

1) 来訪者の居住地

来訪者を居住地別にみると、富山県内からの来訪者は96名、県外からの来訪者は55名、アメリカ合衆国オレゴン州在住の日本人が1名であった。県内では富山市からの来訪者が31名(来訪者全体の20.4%)でもっとも多く、生地地区を除く黒部市内の17名(11.2%)、魚津市の11名(7.2%)、滑川市の7名(4.6%)、入善町の5名(3.3%)がこれに次いだ。上位はいずれも富山市以東の市や町であったが、福光町・井波町など県西部からの来訪者もみられた(図2)。

いっぽう、県外からの来訪者は石川県が15名(9.9%)でもっとも多く、福井県の8名(5.3%)、大阪府と埼玉県の各5名(3.3%)、新潟県と愛知県の各4名(2.6%)がこれに次いだ。全般的には北陸地方からの来訪者が多いものの、関東・中部・近畿の広い範囲から来訪していることが明らかとなった(図3)。

2) 清水の訪問目的

清水への訪問目的は「a.水を飲みに来た(持ち帰らない)」が152名のうち52名(34.2%)、「d.旅の途中で訪れた」が42名(27.6%)であった。これに対して、「b.水をくんで持ち帰る(水くみが主目的)」は36名(23.7%)と比較的少なかった。

3) 訪問時の交通手段

清水に来る際に利用した交通手段は「a.自家用車」が152名のうち107名(70.4%)を占め、「d.観光バス」の12名(7.9%)がこれに次いだ(図4)。「d.観光バス」と回答した12名のうち7名は石川県の旅行会社が企画した宇奈月ビールや清水をめぐるツアーの団体客であった。また、「f.電車+徒歩」と答えた7名のうち5名は列車から下車した直後に生地駅前の「清水の里」に立ち寄ったものであったが、2名は生地駅からある清水まで約2kmの道のりを徒歩で訪れていた。



図2 来訪者の居住地(富山県内)
資料：ききとり調査をもとに作成



図3 来訪者の居住地(県外)
資料：ききとり調査をもとに作成

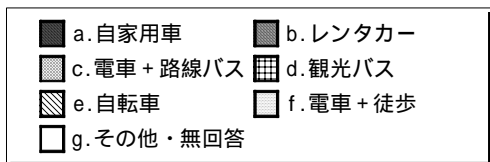
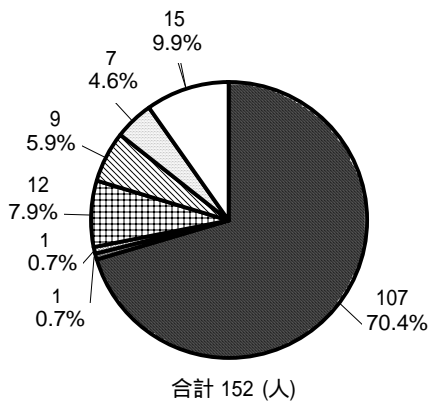


図4 訪問時の交通手段
資料：ききとり調査をもとに作成

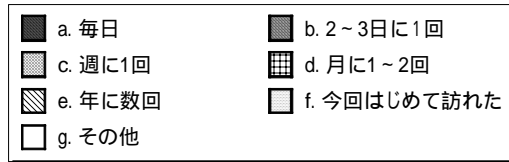
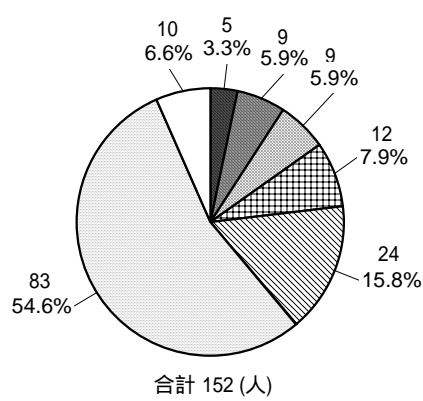


図5 清水の利用頻度
資料：ききとり調査をもとに作成

4) 清水の利用頻度

清水の利用頻度については152名のうち83名(54.6%)が「f. 今回はじめて訪れた」と回答した(図5)。調査を行った8月3日は夏休み中の日曜日、10月26日は生地地区の新治神社で行われる

「たいまつ祭り」の日であったため、海水浴、ドライブ、祭の見学に行く途中で県道沿いにある清水案内板を見たり、コミュニティセンターにいる観光ボランティアに聞いたりして清水の存在を知り、はじめて立ち寄った人が多いものと考えられる。

いっぽう、月1回以上訪れると回答した人(a~d)は合計35名(23.0%)で、当然のことながら大半が新川広域圏(魚津市・黒部市・入善町・朝日町・宇奈月町)の範囲内から訪れていた。しかし、県外から月1回以上訪れる人が5名(石川県3名、長野県・東京都各1名)もあり、県外からの再訪者(リピーター)も増加しつつあるといえよう。

5) 清水の認知手段(複数回答可)

清水の認知手段としては「b. 地元の人から聞いた」(回答数36)がもっとも多く、次いで「g. テレビ番組」(29)、「c. 旅の本や雑誌」(28)、「a. 偶然通りかかった」(23)、「d. 黒部市の観光パンフ」(16)の順となった。いっぽう、「e. 黒部市のホームページ」、「f. 黒部市以外のホームページ」はともに回答数が4であった(図6)。また、「h. その他」のなかでは、「昔から知っていた」(12)、「知人から聞いた」(5)、「以前住んでいた」(3)、「旅行会社の企画」(3)などが目立った。

以上の結果をみると、清水の認知にはテレビ、旅の本や雑誌、観光パンフといった媒体とともに、いわゆる口コミが大きな役割を果たしていることがわかる。とくに「地元の人から聞いた」と答えた人は36名中28名、「知人から聞いた」と回答した人は5名全員が富山県内の在住者であり、県内においては口コミがもっとも有効な認知手段になっている。これに対して県外からの来訪者の認知手段は「テレビ番組」(13)、「旅の本や雑誌」(13)、「偶然通りかかった」(12)の順であり、テレビや本・雑誌といった媒体への依存度が比較的高いことがわかる。いっぽう、新しい広告媒体であるホームページは、本調査の結果をみるかぎり清水のPRには大きな効果をもたらしていない。

6) 観光地化への課題(複数回答可)

この設問では「清水めぐり」を観光化した場合に何が必要になるのかを尋ねた。その結果、「a. 今のままでよい(新しい施設は不要)」(回答数54)という回答がもっとも多かった。また、「h. 水を汚さないためのルールづくり」(24)との回答も多かった。以上のことから、来訪者の多くは清水をむやみに改変せず、現在の環境を保全して欲しいと考えていることが明らかとなった(表3)。

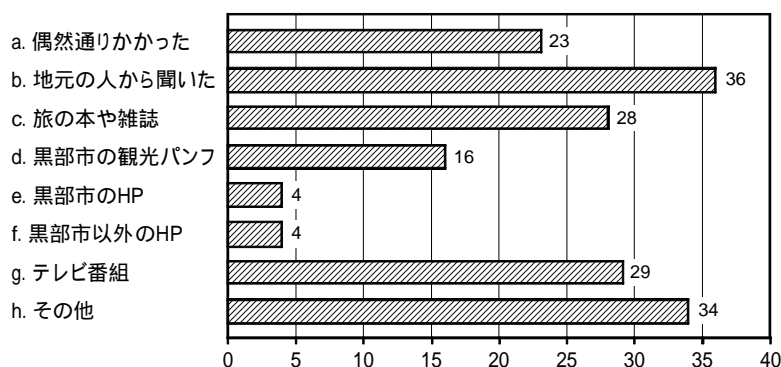


図6 清水の認知手段

資料：ききとり調査をもとに作成

改善要望としては、「d.案内板・パンフ等の充実」(27)、「e.ホームページによる情報提供」(9)など、広報活動の充実を求める回答が目立った。とくに案内板に関してはききとり調査の際に「魚津方面から来ると案内板がまったく見えない」、「清水の里は大きい看板があってわかりやすいが、県道から生地地区の清水に入る場所がわからない」、「国道8号からの案内板がない」、「清水庵の清水の場所がわからない」といった苦言が数多くあり、調査者が来訪者に道を尋ねられることもしばしばあった。また、「b.駐車場の確保」(14)、「c.食堂など飲食店の充実」(15)、「i.まち全体の活性化」(5)など、清水そのものよりも生地のまち全体の活性化や施設の充実を要望する回答が目立った。

7)他の湧水の訪問状況(複数回答可)

この設問では生地の清水以外で訪れたことのある富山県内の湧水をあげてもらった。その結果、もっとも訪問者が多かった湧水は「a.穴の谷の霊水」で、152名のうち63名(対象となった来訪者の41.4%)が訪れていた。また、「b.城山の湧水」、「c.魚津駅前のうまい水」、「d.入善町の扇状地湧水群」、「e.延命地藏の水」、「f.立山玉殿の湧水」、「g.瓜裂清水」も10%以上の来訪者が訪れていたことが明らかになった。a~gにあげた湧水や県内にあるa~g以外の湧水を2か所以上訪れた人は63名にのぼっており、なかにはa~gの7か所すべてを訪れた人も3名いた。

県外からの来訪者に限定して訪れた湧水を見ると、「a.穴の谷の霊水」が55名中13名でもっとも多く、次いで「d.入善町の扇状地湧水群」(11名)、「f.立山玉殿の湧水」・「g.瓜裂清水」(各7名)の順であった。上記の湧水はいずれも「名水百選」に選定されており、水への関心の高まりとともに「名水」を訪れる人が増えてきたことを示しているといえよう。

8)清水に対する感想や印象

「清水を見た、あるいは水を飲んでみた感想や印象」との質問に対しては、「おいしい」、「冷た

表3 観光地化への課題

a	今のままでよい(新しい施設不要)	54
b	駐車場の確保	14
c	食堂など飲食店の充実	15
d	案内板やパンフ等の充実	27
e	ホームページによる情報提供	9
f	洗い場の整備(蛇口の改良等)	4
g	湧水ミュージアム等の施設建設	6
h	水を汚さないためのルールづくり	24
i	まち全体の活性化	5
j	その他	25
合計		183

資料:ききとり調査をもとに作成

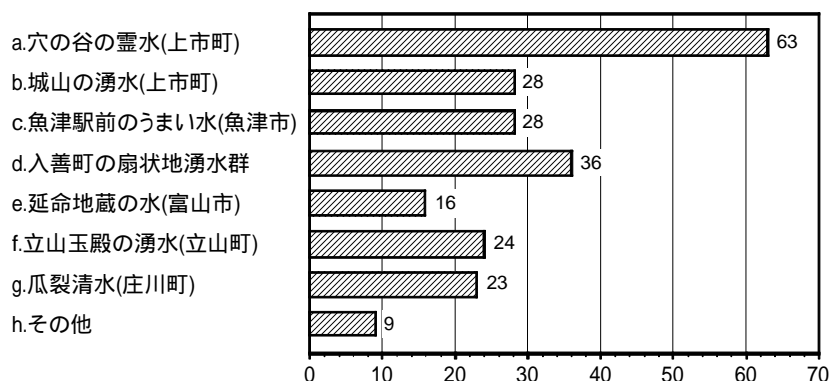


図7 他の湧水の訪問状況(複数回答)

資料:ききとり調査をもとに作成

い、「甘い」、「クセがない」といった肯定的な回答が大多数を占めた。また、「まちあるきが楽しかった」、「ありのままでよい」、「生地の人が親切」など町の風情や人情に関する肯定的回答もみられた。いっぽう、「水が塩辛い」、「思ったほどおいしくない」という否定的回答もごくわずかながらみられた。

おわりに - 「清水めぐり」を中心としたまち歩き観光の可能性と課題 -

本稿では、黒部市生地地区における清水の分布や住民による清水の利用について述べたのち、来訪者による清水の利用実態について考察してきた。この結果、清水の認知度は口コミや各種媒体によって高まり、県内外の広い範囲から人々が清水を訪れていることが明らかとなった。また、来訪者の多くが富山県内の他の湧水も訪れているように、人々の「名水」に対する関心はますます高まっており、「名水」が地域にとって重要な観光資源になりつつあるといえる。

しかし、今回の調査では来訪者の多くが清水を過度に観光化することを好ましく思っておらず、環境保全が第一と考えていることも明らかになった。この点に関しては住民の多くも同様な意見をもっている。生地の清水研究グループでは「まちなか観光ツアー」が始まった2001年から住民にも観光化に対する意識調査を行ってきた。この結果によれば、2001年には住民14名中11名が観光客の来訪やテレビの取材に対し好意を示していた。しかし2002年には好意的な回答が26名中11名と半数を割った。2003年は質問内容が異なるため比較できないが、24名中17名が「今のままでよい」または「水を汚さないためのルールづくりが必要」と回答しており、観光化が清水や地域全体の環境悪化に結びつくことへの懸念が高まっている。

以上の点を考慮すると、清水は単なる sightseeing の対象としてではなく、温泉やグリーン・ツーリズム同様、「自然の恵みを感じられる癒しの場」と位置づける必要がある。博物館施設のような「箱物」を建設したり、洗い場を観光客向けに改造したりすることなく、自然の恵みやそれを有効に利用してきた生地の人々の生活感を感じられる場として保全していくべきである。

いっぽう、生地のまちの活性化も不可欠である。生地にはコミュニティセンター付近の県道沿いに干物・鮮魚の直売店や昆布店が立地している。これに対して市街地は飲食店や特産品の販売店が少なく、まち歩きに対応できる状況にはない。こうした状況を打開するために、多客期には市街地の空き店舗等を活用して臨時の特産品販売施設や簡単な魚料理や名水コーヒーを味わえる茶屋を設けてはどうか。特産品販売施設や茶屋は点在する清水と清水との間に配置すれば、「清水めぐり」のルートが線で結ばれ、回遊性が高まるであろう。また、看板や案内図も景観を損なわない範囲で整備していくべきであると考えられる。

生地の住民の多くは前述のとおり過度の観光化による環境悪化を懸念している反面、「このおいしい水を少しでも多くの人に飲んで欲しい」という意識も強い。清水で洗濯や野菜洗いをしている人たちが来訪者に気軽に声をかけ、談笑している光景もよく見かける。「清水めぐり」を中心としたまち歩き観光を促進するには、長年にわたって生地で生活してきた住民にそっぽを向かれないようにすることが大切だといえよう。

本稿は第 2 章第 2 節で示した 2 回の現地調査に加え、平成 13・14 年度の「地域地理学演習」の一環として実施した 2 回の現地調査(2001 年 11 月 17～18 日、2002 年 11 月 9～10 日)をもとに作成した。2001・2002 年の調査では生地地区の住民による清水の利用実態調査も実施したが、本稿では紙数の都合上、一部の成果を除いて割愛した。なお、計 4 回の現地調査に参加した本学学生・教員および富山県立桜井高等学校の高校生・教諭は以下のとおりである(所属および学年は 2004 年 1 月現在)。

【2001 年 11 月調査】

三浦敬太(人文・卒業生、無線パーツ株)、徳松佳秀(人文・卒業生、北日本印刷株)、大和貴崇伸(人文 4 年)、谷 一樹(地域 4 年)、石尾崇矢・北澤哲史・佐々木洋行・森崎淳二・安田圭一(以上、地域 3 年)、助重雄久

【2002 年 11 月調査】

浅田隼人・池淵正敏・上原洋平・内山隼乙・白川久斗・平沢 光(以上、地域 2 年)、助重雄久

【2003 年 8 月調査】

黒部市観光ボランティアの皆さん、高橋沙紀・殿村実香・中陳あゆみ(以上、桜井高等学校生活環境科 3 年)、山本志津代教諭・河原千里教諭(以上、桜井高校生活環境科)、浅田隼人・上原洋平・白川久斗・平沢 光(以上、地域 2 年)、助重雄久

「映像メディア研究会」取材班

高久実子(地域 4 年)、高島 章(人文社会 2 年)、品田奥寿(人文社会 1 年)

【2003 年 10 月調査】

堺 正行・安田 喬(以上、地域 4 年)、永森 翔・松尾金実(以上、地域 3 年)、マカール・フランソワグザヴィエ(地域 3 年、フランス・ISUGA からの交換留学生)、内山 翔太(地域 1 年)、郭 岩・張 健・李 宝華(地域 1 年、中国・天津社会科学院からの留学生)、助重雄久

2003 年 8 月の調査ではあわせて水質分析も行った。調査結果の一部については 2003 年 10 月 25 日の地域学部主催・地域づくりと地域の未来づくりフォーラム 「海洋深層水の未来を探る」で口頭報告した。口頭報告および水質分析は池淵正敏(地域 2 年)が担当した。また水質分析にあたっては地域学部環境コースの尾畑納子教授にご指導いただいた。

現地調査にあたっては、黒部市商工観光課課長補佐・観光開発係長の本多 茂氏、新川広域圏水博物館構想推進室の木戸瑞佳学芸員、生地蒲鉾有限会社代表取締役社長の中陳和悦氏、生地地区の能登幸太郎氏・たかさんご夫妻ほか多くの方々にご協力いただいた。末筆ながらここに記して深く御礼申し上げます。

注および参考文献

- 1) 榎根 勇・山本荘毅、扇状地の水循環 - 環境システム論序説 -、(1971)古今書院
- 2) 杉沢与一・鍵田正彦、黒部川扇状地湧水井の水位変動(2 年次)、黒部川扇状地、26(2001)、100-108

- 3) 杉沢与一・飛島久明・鍵田正彦、黒部川扇状地湧水井の水位変動(3年次)、黒部川扇状地、27(2002)、93-97
- 4) 飛島久明・上原 毅・杉沢与一・木戸瑞佳・田中直喜・鍵田正彦(第4次)、黒部川扇状地、28(2003)、128-134
- 5) 中田智浩、黒部川扇状地地下水の海への湧出について、黒部川扇状地、27(2002)、2-8
- 6) 日本地下水学会「名水を科学する」編集委員会編、名水を科学する、(1994)技報堂出版
- 7) 吉島敬重、黒部川扇状地の地下水の効果的利用と地理的考察、黒部川扇状地、20(1995)、9-24
- 8) 山口雅功・谷口智雅・原美登里・岩崎健太郎・岩瀬真理子・上田千絵・大木教生・大島 道・大谷幸一・工藤 悟・白石和広・高橋 昌・竹内裕希子・西 克幸・矢野ゆりか、岐阜県郡上八幡における水環境、地域研究、38-2(1998)、29-37
- 9) 肥田 登・吉崎光哉、湧水とくらし - 秋田からの報告 -、(2001)無明舎出版
- 10) 河野 忠、大分の「伝説の水」を科学する、『大分学・大分楽』(辻野 功・日本文理大学「大分学」講座編、2003)明石書店、pp.99-113
- 11) YKK ホームページ(<http://www.ykk.co.jp/japanese/corporate/index.html>)による。
- 12) 地引き網漁は、海岸侵食の激化によって網を引く砂浜が失われたため2001年の冬をもって中断した。しかし、国土交通省の砂浜回復工事が実施されたことから、2003年1月以降は下浦地引網漁業組合の組合員らにより再開された。地引き網漁は1~3月の間、朝と昼の2回行われているが、商業的なものではなく観光用としての色彩が強い。
- 13) 前掲6)のp.114では、新たな掘り抜き井戸の掘削深は87m、湧出量は毎分100リットルとしているが、ここでは清水庵の清水にある案内板の数値を示した。
- 14) 黒部市観光協会観光中長期ビジョン策定委員会、黒部市観光中長期ビジョン報告書 - くるべ・都市観光のまちづくり -

